第3章　分権化に伴う暴力集団の政治的台頭

バンテン州におけるその歴史的背景と社会的特徴[1]

岡本正明

はじめに

インドネシアで権威主義的スハルト体制が崩壊して民主化が始まってから7年、スハルトに次いで大統領に就任したハビビのもとで地方分権化が始まってから4年が経とうとしている。スハルト大統領が作り上げた権威主義体制のもとでは、大統領の意思がそのままインドネシアという国家の意思にほぼ重なり、国家と社会の関係を考えれば明らかに国家の影響力が強かったといえる。その後、98年にこの権威主義体制が崩壊して民主化・分権化が始まると国家と社会の関係は流動化し始め、国家エリートが彼らの意思を強制的に社会のさまざまなアクターに押しつけることが困難になった。「自由・公正」な選挙で選ばれた議員の登場と議会の政治的影響力の増大、表現の自由を比較的保証されたテレビ・ラジオ・新聞の登場、地方分権化に伴う権力の分散の制度的保証、グッド・ガバナンスの名の下に推進される住民参加制度の導入などによって、社会のさまざまな意思が制度的に表明されることが許され、しかもそのことが積極的に評価されるようになったからである。

国家と社会の関係の流動化に伴い、国家、そして地方自治体の政治経済的資源をめぐる権力闘争は当然ながら激化した。インドネシア全般で起きている国家－社会関係の変動とそれに伴う権力闘争の激化については既に拙稿［2005］も含めていくつかの事例研究が出始めている［Aspinall and Fealy (eds.) 2003; Schiller (ed.) 2003; Fera Nugroho et al. (eds.) 2004］。本稿ではそうした権力闘争の実体を分析するよりもむしろ、ジャワ西部のバンテン州を事例として地方の政治経済権力を獲得しているアクターがどのような歴史的背景の中から台頭し、どのような社会的特質をもつのかについて試論を提示したい。民主化・地方分権化後の地方エリートの代表格である地方議員、地方首長については実業

家出身者が増えたと一般にいわれている。また、ハディーズは金と暴力が地方政治における権力掌握の重要な要因であり、政治資金をもつ実業家や暴力を行使できる暴力団が地方政治の主要アクターであるとのべている［Hadiz 2003］。バンテン州においても私的暴力集団の筆頭格にして土建業の実業家が政治経済的に圧倒的に影響力を有しており、その点ではこうした議論が当てはまる。従って、ここで検討したいのは、そうしたアクターがどのような歴史的背景と社会的特質から政治経済的に台頭したのかということである。それではまず、簡単にバンテン州における民主化・分権化後の地方政治経済構造の特徴を見てみることにする。

1. 民主化・分権化後のバンテン州の地方政治経済構造の特徴—ジャワラの台頭

4県2市からなるバンテン州はインドネシアの首都ジャカルタの西隣にあり、2000年10月に西ジャワ州から分離してできたばかりの新しい州である。人口は2004年現在で約900万人を数え、2000年の国勢調査に従えば約95.7%がイスラーム教徒であり、民族構成はバンテン人が46.9%を占める。

スハルト体制が崩壊して民主化・地方分権化が国策になると地方レベルの政治が非常に活性化し始めた。スハルト時代、地方首長ポスト、地方議会議員ポストといった地方政治の要職については、中央政府や万年政権党ゴルカルの中央執行部がその選任をめぐって強い影響力を有していた。しかし、政党結成の自由化に伴って複数の政党が奪い合うポストになり、さらに地方分権化に伴い、政党の地方支部が自党からの候補者擁立に際して影響力を行使できるようになった。その結果、例えばバンテン州内の県知事・市長をみてみると、スハルト時代のようにゴルカル党推薦の非バンテン地方出身者が独占するという構図は崩れた。4県2市のすべてにおいて地元出身者が地方首長になり、パンデグラン県知事にはイスラーム系政党の開発統一党が推薦したディミヤティが、ルバック県知事には民族主義系政党の闘争民主党推薦のジャヤバヤが、タンゲラン県知事にはイスラーム系政党の民族覚醒党推薦のイスメット・イスカンダールがゴルカル党推薦候補を破って当選を果たした。

また、民主化以後に初めて行われた1999年選挙に基づく地方議会構成をみ

てみると、ゴルカル党の独占は崩壊して複数の政党が議席を占めるようになり、かつてのように国軍・官僚出身者ではなく民間出自の議員が増えた。例えば45名の定員からなるセラン県議会では、闘争民主党（民族主義系）11議席、開発統一党（イスラーム系）9議席、ゴルカル党8議席、民族覚醒党（イスラーム系）2議席、その他の5つのイスラーム系政党各1議席、民族主義系政党1議席、国軍・警察会派5議席という議席配分となり、わかっているだけでも民間出自の議員が22名を占めるようになった。また、同じく45名の定員からなるルバック県議会では、闘争民主党17議席、ゴルカル党8議席、開発統一党7議席、民族覚醒党2議席、その他の4つのイスラーム系政党各1議席、民族主義系政党1議席、国軍・警察会派5議席となり、少なくとも25名が民間出自の議員という状況となった[(2)]。

それでは、上のような新しい政治状況をもってバンテン州では民主化のソフト・ランディングがうまくいき、政党政治が開花したということができるであろうか。おそらくそのようにはいえないであろう。単に地方首長や地方議員といった地方政治エリートの所属政党を調べ、一般的な政治理論に沿って地方政治の権力闘争を政党間の権力闘争であるという視点で分析するだけでは不十分である。彼ら地方政治エリートの社会的出自を調べると、政党という政治制度ではかりきれない別種の政治社会ネットワークが存在しており、そのネットワーク間の抗争が地方政治の権力闘争と大きく重なっていることがわかる。

ではそれは何かといえば、一言でいうとジャワラという文化的に認知された暴力集団のネットワークである。近代国民国家は一般に暴力、社会的強制力の管理独占をはかり、治安維持の制度的装置として警察機構を整備する。インドネシアの場合、警察機構と並んで国軍もまた領域管理を行っており、2つの治安維持装置が並立して同様の機能を担っている。ジャワラは、こうした国軍・警察というフォーマルな暴力装置とは全く別個の、つまりインフォーマルな存在でありながらも拳術と呪術を武器にして脅しと暴力で利権を獲得し、国軍・警察にさまざまな便宜提供をはかることでその社会的存続を認められている存在である。ジャワラを他地域との類比で考えてみると、ジャワのジャゴ、日本のヤクザ、タイのナクレーンなどが思い浮かぶ。ただ、ジャワラに特徴的なのは、彼らが古い来歴をもち、その拳術・呪術ゆえに文化的・社会的に広く認知

されているということである。

これらの点については次節以下に譲り、ここでは彼らがいかにバンテン州で政治経済的に影響力を保持しているのかをみてみることにしよう。まず、州レベルでは、州知事を指導する立場に自らを位置づけ、「バンテン州総督」(Gubernur Jenderal Provinsi Banten) と呼ばれることに何のためらいも感じないハサン・ソヒブがいる[(3)]。彼は30年以上にわたりジャワラの集団ともいえる「インドネシア・バンテン拳術家・武芸者連合」(PPPSBBI) 総裁に君臨し続けている大物であり、現在において代表的なジャワラは誰かとバンテン地方の住民に聞けば、ほぼ間違いなく彼の名があがるような人物である。バンテン州ができると、彼は商工会議所 (KADIN) バンテン州支部長、全インドネシア土建業者連合 (GAPENSI) バンテン州支部長、建設業発展委員会 (LPJK) バンテン州支部長など州レベルのさまざまな社会、経済組織のトップに就任するだけでなく、自分の部下をそうした社会、経済組織の要職に据えていった。また、州議会議員が選ぶ州知事選では州議会議員に金をまき暴力の可能性をほのめかし、超党派ネットワークを駆使して彼の長女を副州知事に据えることに成功した。そして、政財官界に張り巡らせたインフォーマル・ネットワークを使って州予算の配分に影響をおよぼし、開発予算の6割を彼のコントロール下に置くに至った。セラン県知事やルバック県知事を傘下に置いているので彼の影響力はそれらの県の開発事業にも及んでいる。

現セラン県知事エディ・ムルヤディは、2000年の県知事選に際してのゴルカル党候補決定段階では、必ずしもハサン・ソヒブが望んだ人物ではなかった [Gatra 2000/3/25, 45]。しかし、地元出身であることも手伝って結局、ゴルカル党からの擁立が決まって当選すると、ハサン・ソヒブの強い影響下に置かれるようになった。また、ルバック県知事ムルヤディ・ジャヤバヤは、父親がハサン・ソヒブと懇意であったことから、2003年の県知事選に当たって30億ルピアともいわれる資金援助を受けて1票差で当時の現職を破り、ルバック県知事に当選した [SP 2003/11/6][(4)]。従って、ハサン・ソヒブには逆らうことができないのである。

一方、彼の圧倒的な政治経済的な影響力に対抗する勢力もバンテン州内に存在する。一例をあげると、バンテン州設立運動を積極的に支持した同州出身の

地方エリートたちの中には、ハサン・ソヒブとそのグループ（俗称「ラウ・グループ」[5]）が州政府を半公然と支配していることに不満を抱いているものがいる。彼らは2002年6月、セラン県副知事タウフィック・ヌリマンを筆頭として「バンテン社会協議会」（M3B）という200人ほどのメンバーからなる団体を結成し、「（州政府の）背後にいる勢力」（kekuatan tersembunyi）を批判した［FB 2002/6/20（1）（2）（3); HB 2002/6/20］。その開催に当たっては、ラウ・グループと対立している拳術家組織のTTKKDH[6]構成員200名が警備に当たった［FB 2002/6/20（1）］。タウフィック・ヌリマンはこのTTKKDHの後援者（pembina）であり、彼らを動員できるのである。このM3Bが会議において間接的とはいえ誰でもわかるようにラウ・グループを批判し、それを受けてハサン・ソヒブが「受けて立とう」（“Saya siap menghadapi mereka.”）［FB, 2002/6/20（1）］と息巻いたことから、M3Bメンバーとラウ・グループの関係は急速に悪化していった。2002年9月頃、バンテン方面の地方軍管区司令官を務めたことのあるアンピ・タヌジワ退役少将の立ち会いで両者の間で話し合いがもたれた。その際、ラウ・グループが黒服に身をまとったジャワラを引き連れてきたのは当然としても、M3Bもまた黒服に身をまとった拳術家組織TTKKDHの構成員を連れてその会談に望んだのである［FB 2002/9/20］[7]。このようにTTKKDHがタウフィック・ヌリマンと組むことに反発したハサン・ソヒブはTTKKDH別働隊（TTKKDH Tandingan）を作り上げた。ジャワラに対抗する上でジャワラの動員は不可欠なのである。

1998年7月、パンデグラン県のジャワラに依存する形で、「全バンテン人潜在能力領導会」（BPPKB）というジャワラ組織がジャカルタで結成された［BPPKB 1998; HB 2004/3/6］。BPPKBは急速にジャカルタ、ボゴール、タンゲラン、ブカシなどのジャカルタ首都圏で借金取り立て、土地強制接収、市場・歓楽街警備などで暗躍することで勢力を拡大している。ジャカルタ在来のブタウィ人がつくる社会組織「ブタウィ・フォーラム」（FBR）や「ブタウィ連絡協議会」（Forkabi）と勢力圏を競い合っており、勢力を誇示するために詰め所（Posko）を各地で作り始めている［*Jaknews.com* 2004/4/24; *tempo-interaktif* 2005/4/8］[8]。バンテン州でも一層の勢力拡大を図り始めるとPPPSBBIと対立する可能性が高い[9]。

さらに、イスラームの倫理観に沿って汚職撲滅を訴えてきた（福祉）正義党もまたジャワラを党員として加えるようになっている［RB 2004/3/23］。同党も所属しているバンテン州議会の院内会派、ABK 会派はバンテン州の開発プロジェクトがプレマン（ごろつき）に支配されているとバンテン州議会内で主張したことがあった。それを聞いたハサン・ソヒブは強く反発して、ラウ・グループの実業家 50 人ほどを連れて州議会に乗り込み、同会派の議員に話し合いを申し込むということもあった［SH 2003/8/28, 2003/9/5; SN 2003/8/28, 2003/8/29; HB 2003/9/4］。こうした経験、さらには恐喝と懐柔策に悩まされた結果、正義党もまたジャワラに頼らざるを得なくなったのであろう。

中央政界との関係では、保安挺身隊（Pamswakarsa）が有名である。98 年 11 月、ハビビ大統領の責任演説を認めるか否かを決定する重要な臨時国民協議会開催に際して、学生がその協議会の開催拒否とハビビ大統領打倒を目論んでデモを仕掛けたのに対して、ゴルカルの要請でバンテンから 5,000 人ほどのジャワラがハビビ大統領支持のために保安挺身隊として送り込まれたのである［Togi Simanjuntak (ed.) 2000: 13–14］。

以上のように、バンテン州の政治を考える上でこのジャワラの存在を無視して語ることはとうてい不可能である。次に、彼らはいったいどのような歴史的背景から現在のように政治の表舞台に登場するようになったのかについて考えてみたい。

2. ジャワラ台頭の歴史的背景

いつの時代、どの社会にあっても「無頼漢」、「ごろつき」、「無宿」、「ならず者」、「暴漢」といった範疇で括られる者たちは存在している[10]。共同体あるいは社会秩序の内と外の狭間に生きる社会的存在であり、そうした社会秩序で定められている正義の体系を無視して暴力を行使する可能性があり、実際にも行使する社会的性格を有する者たちである。徹底的に反社会的で犯罪行為に従事していれば単なる「悪漢」であろうし、富者からのみ金品を奪うような庶民の味方としての性格も兼ね備えているのであれば「義賊」ということになる。ジャワラというのはもともと、バンテン地方におけるそうした社会的存在であ

ったといえる。彼らは勇敢さ・男らしさを尊び、拳術や呪術にたけ、プライドが傷つけられれば暴力の行使をもためらわない者たちのことであり、バンテンにおいてはそうした存在として文化的・社会的に認知されていた。基本的には村のフォーマルなリーダーとは別個の存在であり、賭博場や売春宿から見かじめ料をとり、たかりやゆすりといった犯罪（に近い）行為を行うだけでなく、実際に路上強奪をする者や、牛泥棒をしてジャワラのネットワークを使って売りさばく者もいた。また、村長などの僕（しもべ）として村落秩序を維持する役割を担ったり、ときには自らが村長になることもあった。19 世紀初め頃には、バンテン地方におけるジャワラの存在はオランダ植民地官僚の間で知られており、バンテン地方は他のジャワと比べて遙かに治安の悪い地域としても有名であった［Williams 1990: 45–47］。

19 世紀初頭以降、オランダは植民地支配をジャワ島の村落レベルにまで及ぼしはじめ、村長は植民地行政の最末端の単位になり、その社会的性格も名望家的なものから官吏的なものへと変貌を遂げた。その過程で村長は植民地政庁に仕えるという意味での「公」的存在、フォーマル・リーダーになり、植民地政庁の要請を受けて税・労役などを村民に強要する一方で、村長の地位の最終的正統性を政庁に求める存在となっていった。そして「公」的なリーダーとしての村長の権力は強化された。先に触れたジャワのジャゴの中には村人と村長の間にあって、脅しと暴力を武器にして村長の代わりに税を取り立てる役割を担うものも現れた。ジャワの村落と植民地国家との関係はおおむねこのような解釈で理解されている[(11)]。しかし、バンテンでは若干、様相を異にしていた。もちろん村長は植民地政庁に正統性を求める公的なリーダーではあったが、ジャワ島の他の地域と比べると村長への権力の集中は起きなかったのである［植村 1988: 86–87］。ジャワにおいて村長に権力が一元化していく契機となった強制栽培制度はバンテン地方にも導入されたものの、この制度はバンテンでは定着することがなかった［藤田 2001: 39–42］[(12)]。従って、村レベルでインフォーマルなリーダーが権力を分有する状況が続いたのである[(13)]。植民地支配が村レベルにまで十分に浸透することでインフォーマルな暴力が否定されたり、一元的に管理されたりすることがなかったために、インフォーマル・リーダーがジャワの他地域と比べて非常に強い影響力を保持する社会状況がバンテンで

は生まれた。そして、ジャワラは、ジャワにおけるジャゴのように村長になびくものだけでなく、インフォーマルなリーダーとして影響力を持ちつづけるものも数多く存在していた。20世紀にはいってもジャワラは基本的に脅しと暴力を武器にして台頭していく有力者であり、イスラーム指導者（ウラマー）や貴族と並ぶ地方エリートの一類型であった。なかには村長にまで成り上がった者もいたようであるが、ジャワラの多くはインフォーマル・リーダーとして反植民地権力意識を根強くもっており、たとえば19世紀末のチレゴン反乱など植民地期の圧政に対する反乱の際には彼らがウラマーと並んで主導権を握ったし、1920年代の共産党勢力拡大のときにはジャワラの中にはウラマーと並んで共産党員になるものが続出したのである［Williams 1990］。

1945年に日本軍政が終わったとき、インドネシア各地で権力の空白状態が発生した。スカルノとハッタがインドネシア共和国の独立を宣言したとはいえ、実体はないに等しかったからである。その結果、インドネシア各地で社会秩序が崩壊した。バンテン地方でも例外ではなかった。バンテン地方の場合、植民地期、日本軍政期を通じて統治主体である上級官僚の多くがスンダ人を主体とする非バンテン人貴族であったことから、社会秩序の崩壊はエスニック対立の様相を伴う社会革命になった。ウラマーやジャワラといったインフォーマル・リーダーが立ち上がって非バンテン人の理事官、県知事、市長、郡長らを引きずりおろして行政機構を掌握し、フォーマル・リーダーになったのである［Anderson 1972: 335–337; 岡本 2000: 211–212］。しかし、インドネシア共和国が実体的に権力を掌握しはじめると、再び彼らはインフォーマル・リーダーに戻っていった。この時代の変わり目にもウラマーだけでなくジャワラも秩序変革の担い手として、彼らなりの社会正義の実現を目論んだのである。

3. 制度的存在への変貌

1950年代の議会制民主主義の時代、そして1959年から始まるスカルノ大統領による指導される民主主義の時代というのは、共産党の急速な台頭をひとつの象徴とする政治的流動性の高い時代であった[14]。しかし、1965年の「9月30日事件」によって共産党がインドネシア国軍によって物理的に抹消され、

治安秩序回復作戦司令部司令官であったスハルトが大統領につくと、バンテンも含めてインドネシアには権威主義的な政治秩序が形成されていった。バンテン地方ではジャワラやウラマーといったインフォーマル・リーダーのあぶり出しが行われ、一元的に管理され、そして、政権党になるゴルカル党の集票機能を担わされるようになっていった。ジャワラ用にジャワラ作業部隊、後のPPPSBBI、ウラマー用にウラマー作業部隊といった組織が整えられ、ジャワラ、ウラマーたちは国家に取り込まれていった。インフォーマルとはいえ、国家によって記録され管理される対象になったのである［岡本 2005］。ジャワラの場合、拳術道場がPPPSBBIの傘下にはいっていき、最終的には17州に支部を置き186の流派を抱えるまでにPPPSBBIは拡大した［*gatra.com* 2002/11/6］。

もちろん、国家に取り込まれることのメリットも大きかった。たとえば、ハサン・ソヒブにしても、PPPSBBI総裁になり、ジャワラを広域暴力団的に支配下に治め、ゴルカル・国軍というフォーマルな政治機構・暴力機構と相互依存関係をもっているからこそ、広範に政治的・経済的影響力を拡大することができたのである。さもなければ、その影響力の範囲は限られたものになり、バンテン州全域に広がるはずもなかった。ジャワラの中には村長になるものも多く、1974年1月時点でバンテン理事州に800人いる村長のうち15%ほどがジャワラであったという［PR 1974/1/30］。また、土建業などのビジネスを始めれば彼らが優先的に公共事業を獲得できるようになった(15)。さらに開発の進展とともに、彼らの仕事も増えていき、企業による強引な土地収用と強制的な住民立ち退き、工場警備、工場労働者による待遇改善デモ潰しなどに関わっていった(16)。

ただ、こうして国家の作り上げた制度に収まって飼い慣らされはじめ、そのことで経済的利権を獲得できるようになると、ジャワラのもつ意味に変化が起きはじめる。そもそもどういった社会的性格をもつものがジャワラでありジャワラでないのかといったことについては漠然とした定義しかなく、地域社会の日々の生活の中から、ある人物はジャワラであると判断されていたのに対して、PPPSBBIの設立によって、PPPSBBIの構成員であるか否かがジャワラであるか否かのメルクマールとなっていったのである。ジャワラが社会的存在か

ら制度的存在に変貌を遂げたともいえる。その結果、ジャワラの数が急増した。極言すると、実際に拳術を駆使できるかどうかにかかわらず、黒い服の上下に身をまとい、山刀を振り回すことができれば、ジャワラになり仕事がもらえるようになったのである。2004年1月にバンテン地区警察本部長が「バンテンには85万人のジャワラがいる」とのべるほどにジャワラの数は増加した[SH 2004/1/7]。

もうひとつの変化は、彼らは全くもって社会的正義の代弁者ではなくなったということである。このPPPSBBIのイデオロギーは、「自衛し、民族を守り、国家を守護する」という日本でいえばきわめて右翼的なものであって、国家に取り込まれることを積極的に容認する類のものである[Mansur 2000: 89]。従って、彼らは国家の定める正義の体系とは別の論理で生きる「無頼漢」でも「ならず者」でもあり得なくなり、ましてや国家の作り上げる正義のイデオロギーに対抗する社会正義を実現するような動機付けは消滅してしまったといってよい。その結果、スハルト体制が揺らぎ始めたときには、スハルトを擁護さえしたし、上述のように保安挺身隊を送り込むことでその後継者であるハビビも支援した。

1998年5月、スハルト体制の崩壊に際しても、地方では1945年、1965年とおなじように政治・社会秩序の一時的な空白状態が生じた。バンテン地方では西ジャワ州からバンテン地方を分離してバンテン州を作り上げる運動、バンテンを自分の手に取り戻す運動が始まった(17)。この運動は、スンダ人によってバンテン地方が「植民地支配」を受けているという意識がバンテン地方のエリートに根強くあり、1950年代からたびたび起きてきたが、常に中央政府から拒否されてきた。

1998年に最初にバンテン州設立に向けて立ち上がったのはウラマーと学生たちであった。PPPSBBI総裁のハサン・ソヒブは当初、全くこの動きを支持する気配はみせなかった。かつてのようにジャワラが社会変革の時期に真っ先に立ち上がることはなかったのである。それはバンテン州設立を支持することで既得権益を失ってしまうことを恐れたからである。しかし、地元出身の実業家も支持に回り始め、この運動が大衆化してセラン県、パンデグラン県、ルバック県、チレゴン市を中心としてバンテン全域に広がり始めると、ハサン・ソ

ヒブは態度を急変させた。にわかにバンテン州設立の熱烈な信奉者となり、半ば強引に州設立運動委員会のトップを奪ったのである。そして、その後、ハサン・ソヒブらの硬軟織り交ぜた中央政府へのロビー活動もあって、2000年10月、バンテン州は設立された。

バンテン州の設立後、ハサン・ソヒブ率いるラウ・グループの州政治への影響力は非常に大きなものとなっていった。その点は上述しているのでここでは、ポスト・スハルト後の時代風潮をふまえ、その行動を正統化する彼の論理を見ていく。

32年間にわたるスハルト体制が崩壊して民主的・分権的な政治体制が生まれたということは、統治をめぐる大きなパラダイム変換が起きたことを意味する。というのも、そのことは、中央集権的な開発志向国家（Developmental State）、国家の意向を社会に貫徹させる強い国家であることを放棄して、地域社会に自立的な開発のあり方を模索させる国家を志向し始めたことを意味するからである。スハルト体制崩壊前後にあっては、長期にわたる権威主義体制への反動として民主的な政治体制への希求が強かったし、東カリマンタン、リアウ、パプア（イリアン・ジャヤ）などで独立要求が提示され、その他の天然資源が豊富な地方からは大幅な自治権を要求する声が高まっていた。したがって、民主的・分権的な政治体制の樹立は不可避的な選択であったといえる。また、世界的な潮流から見ても民主化の波は押し寄せてきていたし、統治スタイルとしての地方分権も「市民社会」の樹立による民主化の実現という視点、政府の財政負担軽減という視点から国際援助機関によって積極的に推進されていた。いってみれば、民主的・分権的な政治体制は、国内的にも国際的にも唯一の選択肢だったといえる。そして、ジャワラにとっては非の打ちどころのない政治体制であった。

民主的・分権的な政治体制で重要な役割を果たすことを期待されているのは、日本の例を考えてみればわかるように、非政府組織（NGO）や非営利組織（NPO）である。NGOやNPOは政府が担いえなくなった社会サービスの提供を行うだけなく、自治体や中央政府の行政を監視し、さらには社会開発に積極的に関わっていくことが期待されている。現在のインドネシアも同様である。また、スハルト期の開発が国家による一方的な押しつけの要素が強く、住

民の要望と政府が実際に実施する開発との間に大きな乖離があったことが批判され、政府はファシリテーターであり、住民こそが開発の主体であるという発想が地域開発を実施する上で有効であるとされるようになった。そのために、住民代表が開発の過程に積極的に参加することが重視されるようになってきている。さて、こうした新しい潮流をバンテン州に当てはめて考えてみるとどうなるであろうか。

PPPSBBI というのは、政治組織ではなく社会組織である。そして、前述のように、ジャワラには地方レベルのインフォーマル・リーダー的側面がある。となると、彼らは時代の潮流に乗って、きわめて合法的に政治・行政過程に参与することが認められるようになったのである。また、ハサン・ソヒブについていえば、KADIN バンテン州支部長、GAPENSI バンテン州支部長でもあり、経済界の重鎮であるから、ほぼ間違いなく州政府の開発事業に影響力を行使することができる立場にいる。

上述したように M3B がラウ・グループの台頭に露骨に反発し始めたことに対して、ハサン・ソヒブは次のような形で反駁している。少し長くなるが、彼なりの新しいパラダイム理解が如実に表れており興味深いのでここに引用してみる。

> M3B が行おうとしていることに対して、我々は立ち向かう。民主主義国家であればどこでも、権力を握るのは市民勢力だからである。政府は住民にサービスを提供するだけである。タウフィック・ヌリマンはとち狂っている。この点について疑問がある住民がいるなら法律の専門家に尋ねてみればよい。……バンテンにおける市民勢力はすでに十分強い。そのことは、800 万人のバンテン州の人口のうち、文民でないのはわずかに 18%でしかないことからもわかる。さらに、バンテンの市民勢力は商工会議所や土建業者連合のような経済組織も作っている。……また、バンテンを発展させるために、市民勢力は国軍・警察と歩調をそろえている。もしそのことを信じないというなら、バンテン州警察本部長に聞いてみるがいい［RB 2002/6/22］。

原文では「シピル」(sipil) というインドネシア語が市民の意味でも文民の意味でも使われていることもあり、発話のコンテクストがわからないと一読しただけでは理解しにくいが、ここでハサン・ソヒブが主張しているのはおよそ次のようなことである。民主主義国家では市民が権力を握るのが当たり前であり、バンテンにおける市民勢力の筆頭にあげることができるのは、商工会議所や土建業者連合の州支部を握り、国軍・警察とも協調関係にあるラウ・グループである。

彼の語りにおいては、ジャワラによるインフォーマルな暴力の占有が市民社会の実現と真っ向から対立することが一向に触れられることなく、単に公職についていないことをもって市民勢力と位置づけて、ラウ・グループがバンテン州行政・政治に影響力を有することを正当化している。バンテン人の特質として一般に「ありのままを語る」(blak-blakan) というものがあるが、ここでも言語は自らの権力を露骨に正当化するために使用されている。

4. ジャワラの戦術

では次にもう少し具体的にラウ・グループがどのような戦術をとることで自らを畏怖の対象とし、地方社会において地歩を固めているかを見てみることにしよう。ハサン・ソヒブがジャワラとしては最も有名なので、まず彼の諸特徴からのべることにしたい。

ジャワラの中のジャワラ

彼は1930年にセラン県パブアラン郡で生まれた。1945年に始まる独立戦争期にはチェ・ママットというジャワラが率いるゲリラ部隊に参加していたようである。その後の詳しい消息は不明であるが、不倫問題で郡長を殺害し、強奪事件を引き起こしたことから、ジャカルタにあるヌサクンバンガン刑務所に収容されていたという話が広く聞かれる。しかし、その後は、彼の敬愛する同郷のウラマーの推薦もあってジャワラ作業部隊の隊長に就任し、さらには実業界にも進出して影響力を拡大していった。その過程では暴力と脅迫も有効であったが、同時に助けを求めてくるものには現金を与え、モスクには改築用の資金

提供を行い、新聞記者などのジャーナリストが訪れてくれば心付けを渡すといった具合に、親分として気前よく振る舞うことは忘れなかった。また、彼が世話になった人物に対してはその親族も含めて義理堅く世話しつづけている[18]。

ハサン・ソヒブがジャワラの中のジャワラとして位置づけられるのは上記のような態度を有するからである。ジャワラの世界にあって殺人はそれほど否定的には語られない。むしろ、その人物に対して一般人が畏怖心を抱く上で好都合でさえある。また、暴力と脅迫といった恐怖心を与える行為の一方で金銭供与を行うというのは、人間が優劣関係の明確な間柄で他者とつきあう場合に有効な恐怖付与と物欲充足の2側面を彼が理解していることを意味する。そして、彼の世話になった人物に仁義を尽くすのは彼自身の本心であると同時に、彼の配下の者にも同様の態度を彼にとらせて裏切らせない関係構築の上で有効なのである。

呪力のパフォーマンス——硬い頭、割れる石

ハサン・ソヒブの土建会社がパンデグラン県ラダ湾の灌漑プロジェクトを請け負い、灌漑建設の土台として堆積岩を使用していた。しかし、建設計画に従えば小石を使う必要があった。プロジェクト監査官は、本プロジェクトが計画に沿っていないことから小石を使用して建設をしなおすように求めた。

部下からこの件について報告を受けたハサン・ソヒブはプロジェクト監査官のもとを訪れて叱りつけた。彼は監査官に対して堆積岩が堅いかどうか尋ねた。監査官が堆積岩は堅いと答えると、ハサン・ソヒブは堆積岩を手にもって自分の頭に打ちつけてその岩を砕いた。これを目撃した監査官は恐れをなしてバンテンからの異動を求めた［Abdul Hamid 2004: 48］。

この事例からいえることは、仮に自分に非があっても、それをあからさまに咎められると、認めるどころかプライドが傷つけられたということで、その非難した人物を糾弾したということである。しかも、その糾弾は尋常ならざる呪術＝呪力（ilmu）を身に帯びていることを相手に知らしめるような仕方で行われたのである。

脅迫と金―バンテン州知事選

2001年、最初のバンテン州知事・副知事を選ぶ選挙が州議会で行われた。その州議会において州知事選をめぐる審議が行われている期間中、PPPSBBIのメンバーが会議場の中で議員間のやりとりをチェックしつづけており、議会の外では黒の上下に山刀を携えたジャワラが警備に当たっていた。議員たちにとって携帯電話のショート・メッセージで脅迫文を受け取ることは日常的なことであったが、2001年12月3日の州知事選当日には、山刀を携えたジャワラが議員の車1台に数人ずつ張り付き、仮にハサン・ソヒブが望む候補が州知事・副知事に選ばれなかった場合には車を破壊する準備をしていた。1会派が州知事選のプロセスが不当であることを理由に投票に参加しない意思を表明すると、「左足か右足かどっちがいい？」という脅迫が噂で広がっていった。もし投票しないなら左足か右足のどちらかの足が山刀で切り落とされるぞという脅しである。

脅迫だけでは議員もついてこないことは十分にラウ・グループも理解しており、議員に金を積むことも忘れていない。議会で要職を握る議員には約5億ルピア、ふつうの議員に対しては約2億から3億ルピアが手渡されたようである。さらに、審議中にハサン・ソヒブは彼の候補を支持しないPDIP会派に向けて札束をばらまくことで、資金力を見せつけると同時に彼の側につけば金が手にはいることを示した［Abdul Hamid 2004: 93-96］。

この事例からいえるのは、ジャワラが意思を貫徹したいときには脅迫でも金でもあらゆる手段を行使するということである。ただし、敵と判断した人物を殺害することはあまりない。誘拐して強制的に立場転向を求めるぐらいがせいぜいであろう。殺して新たな敵を作るよりも脅して懐柔して味方に引き入れた方が遙かに効率がよいからである。

虚勢と好意の押しつけ――独立記念日

独立記念日に当たる2003年8月17日夜7時、私はPPPSBBIセラン県支部が主催する催事「パブアラン郡における顔役及び青年とルトゥン・カサルン道場との交流会」に参加した。PPPSBBIの構成団体である拳術道場が、その道場のあるパブアラン郡の顔役と青年を招待するかたちで開催した独立記念日の

催し物である。まずは道場主であり PPPSBBI セラン県支部長の U 氏が開会の挨拶を行った。そのとき、郡長や村長などの自治体関係者や警察関係者が出席していないことを公然と非難し、後日、直接、彼らをなじってやると発言した。

続いて地元顔役の挨拶が続き、それから、PPPSBBI の支援で昼間に行われた少年らによるサッカー大会の勝利チームにトロフィーと賞品が送られた。続いて、私が日本からジャワラ文化を学びに訪れた研究者として舞台に立たされ、記念品交換会が行われた。私がたまたま持ち合わせた「新撰組」と書かれた鉢巻きを U 氏に贈呈し、私が PPPSBBI の黒い制服とバッジを受け取った。そのあと、U 氏は次のように語った。「今、ここでこの日本の客人は、今度、我が PPPSBBI のメンバーを日本に招請するといってくれた！」それを聞いた聴衆は大いに盛り上がった。しかし、私自身は全くそのような発言はしていない。その後、同道場の生徒や先生によって拳術の型や、山刀を体に強く押し当てても平気であることをみせるデブス debus と呼ばれる技の披露が行われた。最後に、ダンドゥット歌手による歌と踊りがあった。U 氏やその部下の S 氏の要請を受けて私も聴衆の面前で踊った。要請を拒否していると、彼らの表情が次第に険しくなる以上、拒否することはできなかった。この一連の催事が行われている間、PPPSBBI 自身が借り上げた大型のビデオカメラが回っており、一部始終を録画していた。そのカメラについて U 氏の部下の 1 人は、「誰もわからないから、SCTI［インドネシアの有力民放のひとつ］が取材に来ているといっておけ」と言い放っていた。

この事例からいくつかのことがわかる。まず、自治体関係者や警察関係者が出席していないことを U 氏が非難したとき、そこで重要なことは、実際に彼らが出席していないことではない。むしろ、PPPSBBI は国家機構の構成員を表だって非難できる（だけの力をもつ）ことを聴衆に示すことであった。

次に、PPPSBBI メンバーは日本に招請されると勝手にいってみたり、SCTI が取材に来ているといってみたりする点を見てみれば、自分たちのイメージ向上につながる限りはその場限りの嘘をつくことに何の躊躇もない。また一般住民を愚民視しているともいえる。

3 つめに、私を無理に踊らせたことからわかるように、平然と好意の押しつ

けを行い、それを相手が拒否すれば不愉快な対応をとる。かといって、安易に好意を引き受ければ、後でそのつけを払わされることになる。あるNGOメンバーが（PPPSBBIメンバーから）「寄付を受け取るのが怖い」（“Takut disumbang.”）とのべたことがあるが、それは好意と思って受け取ってみたものの、その後、そのことを理由として彼らが恩を着せてくることが怖いからである。

以上の記述からジャワラがどのような戦術をもちいているか、そのおおよその特徴が浮かび上がって来るであろう。脅しと暴力の利用、時宜にかなった気前の良さ、パトロン・クライアント関係の活用、尋常ならざる呪術＝呪力の誇示、好意の押しつけと見返りの要求、虚勢とはったり、などである。こうしたパフォーマンスにたけた社会集団が優勢にある社会では民主化・分権化によっていわゆる西欧的意味での市民社会が確立されると想定することは困難である。このバンテン州の事例からは、グローバルな政治経済の潮流が地域社会の論理にあっさりと呑み込まれていることが明瞭である。

おわりに

ここまで、バンテン州においてジャワラが政治経済的に果たす役割、その台頭の歴史的背景、その社会的諸特徴について触れてきた。実際にはラウ・グループ、TTKKDH、BPPKBなどに所属しないジャワラ、つまり「義賊」的性格を残したジャワラもいるようではあるが、彼らが州レベルで政治経済的に影響力をもっているわけではないことから触れなかった。それでもおおよその現在のジャワラ像はつかめたと思う。では今後も圧倒的にラウ・グループが優位に立つ政治社会状況がバンテン州において継続するであろうか。次のような点を考慮すると、その可能性は薄いであろう。

世代交替と権力分散

ハサン・ソヒブの年齢は75歳（2005年現在）であり、現役で活躍できる期間はそう長くはない。もちろん、彼もそのことは十分に理解しており、PPPSBBI総裁の後任の育成を始めている。しかし、ハサン・ソヒブの地位は

彼が30年以上にわたってPPPSBBI総裁であったからこそ築き得たのであって、後任総裁が就任早々にジャワラをまとめ上げることは困難である。後任総裁に反発するジャワラたちは、もとからハサン・ソヒブに対抗していた勢力と結びついたり、40人以上いるハサン・ソヒブの子供のいずれかを担ぎ出したりして新たな権力中心を作ろうとするであろう。そして、曲がりなりにも一元化していたジャワラの権力は分散して抗争が始まり、政治的にもバンテン州は不安定化する可能性が高い。

県知事、市長の政治的台頭

ラウ・グループの強い影響力はバンテン州政府やセラン県政府に絡む政治経済的リソースを基盤としており、チレゴン市やパンデグラン県について、ましてやジャカルタ首都圏との経済関係が強いタンゲラン県やタンゲラン市に対して強い政治経済的影響力を行使できているとはいえない。村長からチレゴン市長になったアア・シャアートはハサン・ソヒブに恩恵を受けたことのあるジャワラであり、タンゲラン県知事のイスカンダールはハサン・ソヒブのお墨付きもあって県知事当選を果たした人物である［FB 2003/1/6］。しかしながら、ハサン・ソヒブがチレゴン市政やタンゲラン県政運営にさして影響力をもつわけではない。むしろ、2003年度以降、県知事や市長は自らの自治体における政治経済的基盤を武器にして州予算の分捕りを目論みはじめている。それが成功すれば、結果としてラウ・グループは利権を失い、その優位が弱まっていく可能性がある。

州政府が各県・市で実施する開発事業の大半が県・市政府の開発計画と十分な調整を経ないまま、ラウ・グループの土建業者によって行われていることに県・市政府は反発して、州内の県知事・市長が連合したのである。県知事、市長は州政府にフレッシュ・マネーを配分するように求めたのである。フレッシュ・マネーとは紐なし補助金のことである。紐なしであれば県知事、市長が州から降りてくる予算の使途を自由に決定することができる。こうした要求に対して州政府は次のような対策を打ち出した。1）2004年度以降、州政府はフレッシュ・マネーを認める代わりに、県・市にはプロジェクトを割り当てることにした。プロジェクトを拒否する自治体には割り当てを拒否した［*tempo-*

interaktif 2004/4/1]。プロジェクト形式であれば、相変わらずラウ・グループがプロジェクト請負先の決定過程に影響力をもつことができる。2）ハサン・ソヒブのおかげでルバック県知事になったジャヤバヤは、フレッシュ・マネーを州予算から求める他の県知事・市長と違って、州政府からはプロジェクトをもらいたいとのべた［SH 2004/1/20］。ジャヤバヤは明らかにハサン・ソヒブの立場を支持している。これでバンテン州内の県知事・市長連合の一角は崩れた。

今のところ、こうした州政府の対抗策はとりあえず功を奏しているが、州政府と県・市政府との関係は良くない。はじめにあげたハサン・ソヒブの後継問題とも絡んで、県知事、市長が州政府、州議会にネットワークを張り巡らせていけば、州予算のフレッシュ・マネーは復活し、結果としてラウ・グループの利権は減少していく可能性がある。

国軍・警察との関係

ジャワラの武器は山刀であり、国軍・警察の武器は銃である。2組織間で武力抗争が起きればどちらが勝つかは明瞭である。国軍・警察が治安維持上の理由からジャワラを不要だと判断したり、ジャワラからの見返りよりも自らビジネスを積極的に展開したほうが有利だと判断すれば潰しにかかる可能性がある。ラウ・グループが現在のような権勢を謳歌できるのは、ひとつには陸軍特殊部隊や警察に定期的に貢ぎ、警備が必要なときには警察よりも最前線でジャワラが警備に立つなど良好な関係を築いてきたからである。しかし、ラウ・グループの利権独占が目に余り、国軍や警察にも反感をもつ者が現れている。2004年、PPPSBBI構成員がセラン県の中心市場であるラウ市場で陸軍特殊部隊員によって真っ裸にされたのはそれを象徴する事件であった(19)。また、セラン県副知事タウフィック・ヌリマンがハサン・ソヒブに対抗できるのは陸軍特殊部隊の一部が彼を支持しているからである。ただここで重要なのは、陸軍・警察といったフォーマルな暴力機構が統一的にジャワラを統制下に置くような事態にはなり得ないということである。

たとえば、2005年に行われるセラン県知事直接選挙では、陸軍特殊部隊の一部の支援を得た副知事タウフィック・ヌリマンが立候補すると、現職県知事

のブンヤミンは、出馬のために早期退役したセラン地方軍小分区（Kodim）司令官マクムン・シャフロニ少佐を自らの副知事候補に担ぎ出した。さらに、陸軍諜報局のディディ・スナルディ中佐（現役）が県知事候補に立候補している。セラン県レベルで陸軍・警察は県知事選をめぐって分裂していき、ジャワラもまたその分裂に沿う形で分裂していき、フォーマル、インフォーマルな暴力機構が入り乱れた抗争に発展していくかもしれない。

大衆による抵抗の萌芽

2003年2月、ラウ市場の小売人など9,000人あまりが暴徒と化して県議会、セラン県地域開発企画院長官宅、そしてPPPSBBI本部を襲撃し、9台の自動車を破壊し、3人のジャワラも含めた9人が負傷する事件が起きた。そもそもの発端は、ハサン・ソヒブの所有する企業が請け負うかたちで、セラン県政府がラウ市場の全面改装とそのための3,000人あまりの小売人立ち退きを決定したことから始まった。2000年にラウ市場で発生した不審火により改築は不可欠であったが、改築後の店舗購入価格が高すぎること、2007年まで有効なはずの営業許可権が無効になる可能性があること、不審火による損害で借金を返済しきれていないことなどから、小売人は全面改装に反対していた。その反対を押し切るかたちで全面改装が決まったことから小売人がデモを決行した[SH 2003/2/18, 2003/2/20]。当初は平和なデモであったが、続々と一般住民が参加して群集心理が高まっていき、セラン県の決定の背後にいて不審火にも関与が噂されているハサン・ソヒブへの怒りも込めてPPPSBBI本部が襲撃されたのである。こうした住民の動きは刹那的ではあるが一種の社会運動であり、うまく組織化していけば住民の連帯という発想がバンテンでも根付くのかもしれない。

こうした4つの動向以外にも長期的にバンテン人におけるジャワラ理解の再定義をはかろうとしているグループの活動もあるが、その結果は1世代ほどすぎてからでないとわからないと思われるので、ここでは敢えて触れなかった[20]。いずれにしても、民主化・地方分権化のもとで地方政治のダイナミズムが高まり、ジャワラのように暴力を政治資源とするアクターがインドネシアの各地で目立ちはじめている。このような状況において地方における政治権力と暴力の

関係を正面から見据えた微視的研究を積み重ねてゆく必要性は高い。

注

(1) 本論におけるバンテン州の地方政治に関する調査は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究B（1）「インドネシアの民主化における地方政治の変容」（平成14年度～平成16年度、研究代表者：水野広祐）、若手研究B「地方分権化後のインドネシアの地方政治の構造再編分析―公共事業に焦点を当てて」（平成16年～平成18年、研究代表者：岡本正明）を受けて行った成果の一部である。

(2) 県議会議員のデータは各県の選挙管理委員会から収集したもので、その収集に当たっては、バンテン在住のM・イワン氏に世話になった。記して感謝する。

(3) ハサン・ソヒブの政治経済権力拡大の過程については拙稿［2005］参照。

(4) 資金援助については、関係者とのインタビュー、2004年3月9日。

(5) ハサン・ソヒブのグループがラウ・グループと呼ばれるのは、セラン県最大である「ラウ」市場の隣にハサン・ソヒブが率いる一連の業者連合、企業が集まるコンプレクスがあるためである。

(6) TTKKDHとは、チマンデ流の拳術道場であり、2002年5月頃にはママン・リザル（ゴルカル党セラン県議会議員）が総裁職をはずされた後もその地位を譲ろうとせず、組織内対立が起きていたようである。そして、ママン・リザル系のTTKKDHが、ハサン・ソヒブによるバンテン州官房長官アイップ更迭の試みを批判するなどハサン・ソヒブと対立していた［HB 2002/5/20, 2002/5/23］。

(7) NGO関係者とのインタビュー、2003年8月19日。

(8) NGO関係者との電子メールによるインタビュー、2005年4月26日。

(9) BPPKB創設に携わったエントン・スグリワ（BPPKBバンテン州支部長）によると、2006年現在でもBPPKBとPPPSBBIの関係は表面的には友好関係にある。ただし、いまだにBPPKBがPPPSBBIの拠点であるセラン県に支部を作ることができないのは、PPPSBBIの無言の圧力のためであると思われる。エントン・スグリワとのインタビュー、2006年1月28日。

(10) 「無宿」「無法者」「悪漢」の中でも、「豊かな者から奪い、貧しい者に与える賊」、民衆の側から見れば「正義」を体現しているとイメージされる賊である「義賊」に焦点を当てたものとしては、南塚［1999］がおもしろい。また、中東のイスラーム都市社会の無頼については、佐藤・清水・八尾・三浦［1994］が参考になる。

(11) ジャワのジャゴについては、Ong Hok Ham［1978, 1984］、Schulte Nordholt［1991］が優れている。また、19世紀後半から20世紀初頭のジャワ、マドゥラにおける村長の社会的位置づけについては、植村［1988］が優れている。

(12) 強制栽培制度の要諦は、本論文との関係でいえば、村長が「強制栽培に要する耕地の具体的な調整・管理、栽培労役の組織化、地税徴収の割当、栽培報酬の分配、などの職務を通して地位を強化し、地税歩合・栽培歩合のほか、村内の優等田を職田として保持したり、村内住民から労役を徴発する権限も保持していた」［宮本 2003: 105］ということである。

(13) 藤田によればインフォーマル・リーダーとしての「長老」が重要な役割を果たし続けたということになる。おそらく、ジャワラの中にはこの「長老」に位置づけられていた者もいたであろう。

(14) 残念ながらこの議会制民主主義の時代、指導される民主主義の時代におけるバンテン地方の政治社会状況については全くといってよいほど研究がない。ただし、1950年代に西ジャワでカルトスウィルヨが主導してイスラーム国家樹立運動、反政府運動を始めたとき、ジャワラは国軍に手を貸してその反乱運動の鎮圧に回った［Wilson 2002: 254-255］。そして、この協力関係が後のスハルト体制期につながっていったことは間違いないようである。

(15) ハサン・ソヒブ自身のビジネスの拡大については、Lukman Hakim［2001］にある彼とのインタビューに基づいて書かれた章（156-161頁）がよくわかる。

(16) NGO関係者とのインタビュー、2003年12月6日。

(17) バンテン州設立の政治過程については、岡本［2001］参照。

(18) ハサン・ソヒブから何らかの恩恵を受けた人物による彼の評価については、彼の伝記［Mansur 2000］にある地方有力者のコメントが参考になる。また、Tihami［1992］はハサン・ソヒブをジャワラの典型的モデルとしてウラマーとジャワラに関する研究を行ったもので、その中の事例には興味深いものも多い。

(19) 関係者とのインタビュー、2004年3月9日。

(20) 例えば、「世界の家」というNGOの試みは興味深い。「世界の家」については、拙稿［2005］で少し触れている。

参考文献

植村泰夫　1988「19世紀後半～20世紀初頭ジャワ・マヅラのデサ首長の社會的地位をめぐって」『東洋史研究』47(3): 76-118。

岡本正明　2000「革命期を生き抜いた植民地期原住民行政官吏（パンレ・プラジャ）：インドネシア・西ジャワ州の場合」『東南アジア研究』38(2): 203-225。

――　2001「改革派に転向したスハルト期地方エリートたち――バンテン州新設の政治過程に焦点を当てて」『アジア・アフリカ地域研究』1: 186-211。

――　2005「インドネシアにおける地方政治の活性化と州「総督」の誕生――バンテン地方の政治：1998-2003」『東南アジア研究』43(1): 3-25。

佐藤次高・清水宏祐・八尾師誠・三浦徹　1994『イスラム社会のヤクザ――歴史を生きる任侠と無頼』第三書館。

藤田英里　2001「植民地期ジャワの長老とバンテン村落」『史學研究』234: 24-47。

南塚信吾　1999『アウトローの世界史』日本放送出版協会。

宮本謙介　2003『概説インドネシア経済史』有斐閣選書。

Abdul Hamid, 2004, *Peran Jawara Kelompok Rawu Terhadap Kemenangan Pasangan "Djoko-Atut" dalam Pemilihan Gubernur Banten dan Wakil Gubernur Banten Periode 2001-2006*, Skripsi, Fakultas Ilmu Sosial dan Ilmu Politik, Universitas Indonesia.

Anderson, Benedict R. O'G., 1972, *Java in a Time of Revolution: Occupation and Resistance, 1944-1946*, Ithaca and London: Cornell University Press.

Aspinall, Edward and Greg Fealy (eds.), 2003, *Local Power and Politics in Indonesia: Decentralisation and Democratisation*, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.

BPPKB 1998, *Deklarasi tentang Pembentukan Wadah Berhimpun Keluarga Besar Bhanten*, n.p.

Fera Nugroho, Pradjarto Dirdjosanjoto and Nico L. Kana (eds.), 2004, *Konflik dan Kekerasan pada Aras Lokal*, Salatiga: Penerbit Pustaka Percik.

Hadiz, Vedi R., 2003, 'Power and Politics in North Sumatra: The Uncompleted Reformasi', in Edward Aspinall and Greg Fealy (eds.), *Local Power and Politics in Indonesia: Decentralisation and Democratisation*, pp.119–131, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.

Lukman Hakim, 2001, *Buah Bibir Tokoh–tokoh Banten*, n.p.

Mansur, Khatib, 2000, *Profil Haji Tubagus Chasan Sochib beserta Komentar 100 Tokoh Masyarakat Seputer Pendekar Banten*, Jakarta: Pustaka Antara Utama.

Schiller, Jim (ed.), 2003, *Jalan Terjal Reformasi Lokal: Dinamika Politik di Indonesia*, Yogyakarta: Program Pasca Sarjana Politik Lokal dan Otonomi Daerah Universitas Gadjah Mada.

Schulte Nordholt, Henk, 1991, 'The Jago in the Shadow: Crime and "Order" in the Colonial State in Java', trans. by Ernst van Lennep, *RIMA* 25 (1): 74–92.

Ong Hok Ham, 1978, 'The Inscrutable and the Paranoid: An Investigation into the Sources of the Brotodiningrat Affair', in Ruth McVey (ed.), *Southeast Asian Transitions: Approaches through Social History*, pp.112–157, New Haven: Yale University Press.

——, 1984, 'The Jago in Colonial Java: An Ambivalent Champion of the People', in A. Turton and S. Tanabe (eds.), *History and Peasant Consciousness in South East Asia*, Senri Ethnological Studies 13: 327–343.

Tihami, M. A., 1992, *Kiyai dan Jawara di Banten*, M.A. Thesis, Universitas Indonesia.

Togi Simanjuntak (ed.), 2000, *Premanisme Politik*, Jakarta: ISAI.

Williams, Michael C., 1990, *Communism, Religion, and Revolt in Banten*, Ohio: Ohio University Center for International Studies.

Wilson, Ian Douglas, 2002, *The Politics of Inner Power: The Practice of Pencak Silat in West Java*, Ph.D. dissertation, Murdoch University.

新聞・週刊誌記事

Fajar Banten (FB)

2002/6/20 (1): Kongres M3B Berakhir: Tak Perlu Merasa Takut.

2002/6/20 (2): Gubernur Enggan Komentar Soal "Kekuasaan Tersembunyi."

2002/6/20 (3): Rekomendasi Kongres M3B.

2002/9/20: M3B Bertemu Kubu Chasan Sochib di Jakarta.

2003/1/6: Dalam Pilkada Kabupaten Tangerang: KNPI dan Chasan Sochib Dukung Ismet Iskandar.

Gatra

2000/3/25: Hal. 45: Pemilihan Bupati; Demo Putra Daerah.

Harian Banten (HB)

2002/5/20: TTKKDH 'Maman' Dukung Ayip: Kirim Surat ke Depdagri Minta Ayip Tetap Sekda.

2002/5/23: Tb Chasan: Jangan Politisasi TTKKDH: Buntut Dukungan kepada Sekda Ayip.

2002/6/20: Gubernur Enggan Komentar Soal "Kekuasaan Tersembunyi."
2003/9/4: Pengusaha Banten Desak Fraksi ABK Minta Maaf.
2004/3/6: Ketua DPD Badan Pembina Potensi Keluarga Besar Banten (BPPKB) Tb Endoh Sugriwa: Kami Siap Amankan Pemilu.

Pedoman Rakyat (PR)
1974/1/30: 100 "Lurah Jawara" Mengikuti Penataran.

Radar Banten (RB)
2002/6/22: Chasan Sochib: M3B & Taufik Salah Kaprah.
2004/3/23: PKS Rekrut Jawara.

Satelit News (SN)
2003/8/28: Preman Proyek itu Gentayangan di Banten.
2003/8/29: Ketua Kadin Banten Tantang Anggota DPRD.

Sinar Harapan (SH)
2003/2/18: Ribuan Pedagang Mengamuk, Kota Serang Mencekam.
2003/2/20: Disidik, Tersangka Perusuh Demonstrasi di Serang.
2003/8/28: Perseteruan Anggota DPRD dengan Pengusaha Sochib Merebak.
2003/9/5: Heboh Soal Premanisme Proyek di Banten: 50 Pengusaha Tekan Fraksi ABK DPRD.
2004/1/7: Kapolwil Akui Gunakan Jawara untuk Amankan Banten.
2004/1/20: Pemkab Lebak Tolak Bantuan Dana dari Pemprov Banten.

Suara Pembaruan (SP)
2003/11/6: Mulyadi Jayabaya Dipilih sebagai Bupati Lebak.

オンライン文献

gatra.com (http://www.gatra.com/)
2002/11/6: Bandar Lampung: Pendekar Banten, Jaga Persatuan.

Jaknews.com (http://www.jaknews.com/)
2004/4/24: Massa Banten-FBR Bentrok Lagi.

tempointeraktif (http://www.tempointeraktif.com)
2004/4/1: Banten Tunda 31 Proyek Senilai Rp90 Miliar.
2005/4/8: Polisi Minta Posko FBR dan BPPKB Membubarkan Diri.